中高生とともに差別と闘う

『スタートはマイナスから』

吉成タダシ

ユウキのその後

ユウキのその後について少しふれておきたいと思います。

高校に進学してソフトボールへと転向。インターハイでは中心選手として活躍し、県大会で優勝。全国大会に出場してホームランをかっ飛ばしたようです。そして県内のソフトボール社会人チームとして強豪の企業に就職したと聞いていました。

成人式後の祝賀会で、そんなユウキの近況を本人から直接聞いて私は驚きます。なんと、会社を辞めたというのです。これにはショックを受けました。心のどこかで裏切られた感覚になってしまいました。

ところが、では今、何をしているのか。訊くと、地元の私立大学に通っているというのです。

「どうして?」と訊く私に、

「学校の先生になりたい」と。

またしても驚かされました。動揺して息を呑んだのを悟られないようにひと呼吸おいて、重ねて訊きました。

「――お金もかかるだろう」

彼の家庭環境を慮って問うと、

「一年分の給料を貯めてたので」と。

なんともはや、参りました。こんな先生が教育現場にいてほしいと、心の底から思いました。子どもたちのありのままの思いや生活をしっかり受けとめられる教師、ユウキにはそんな教師になってほしい。新たにできた、私の夢でした。

お母さん、大好きです

他にもたくさんの思いを乗せて、それぞれの「別れの言葉」が語られていきました。

「野球部のみんなへ。中学校生活の一番の思い出は、修学旅行や文化祭よりも、キミたちと野球ができたことです。試合中でのピンチなところをいつもキミたちに助けられ、キミたちのおかげで県大会で準優勝することができました。本当にありがとう。

そして先生方、勉強や部活、勉強以外で教えてくれたことを、これからも役立てていきたいと思っています。感謝しています。

そして最後に、お母さん。今までに何度も怒られたりしたこともあって、うざいとか思ったこともありますが、今まで温かく見守ってくれてありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。お母さん、大好きです」

アツトモはこの「別れの言葉」で、一生分の親孝行をしたのではないかと思いました。母子家庭での苦労を感じさせず、何にでも人一倍熱い素敵なお母さん。お母さんは私の席の近くでこの言葉を聞いていたのですが、照れるやら嬉しいやら大号泣。周りにいた保護者仲間は笑顔いっぱいで、祝福の声があがっていました。

この町にいたくない

「小学校の時から九年間、みんなと一緒に生活してきて、小学生の時は辛いこととかいっぱいあって、この町にいたくないって思った時もあったけど、中学生になって話をする人が増えて、学校にいる時が一番楽しいと思えるようになりました。これから三Aのみんなと同じ教室で授業を受けたり、給食を食べたり、話をしたりすることは、もう一生ないんだと思うと、今まで生きてきたなかで一番悲しい気持ちになります。

そして、いろいろとトラブルもあったりして大変なクラスでしたが、ずっと見守ってくださった保護者の方や、先生方、本当にありがとうございました。本当に感謝しています。

明日からはみんなバラバラになるけど、みんなのことは忘れません。三Aのみんなのことが大好きです。今までありがとうございました」

実は多くの生徒が、同じような思いをもっていました。

地元中学校に行きたくない。

この学年から早くお別れしたい。

この町から離れたい。

それだけたくさんの、いろんな悲しい出来事が、小学校時代から子どもたちに起こり続けてきたのです。小中一校ずつの持ちあがりであることが、子どもたちにとってゼロからのスタートではなく、マイナスからのスタートとして映っていたのです。

スタートはマイナスから

入学時は誰もが同じスタートラインに立っているようなイメージをもつことがありますが、決してそうではありません。それぞれの家庭が抱えている背景は違います。それを背負って子どもたちは登校してきます。子ども同士の関係性も同じです。辛い思いをしてきた子どもが入学と同時にゼロに戻ってスタートできるかといえば、メンバーが変わらない以上、同じなのです。

また、保護者が学校や先生を見る意識も同じです。進学・進級して学校や先生が変わったからといって、ゼロから見られるかといえば、そうではありません。一度でも自分や我が子が心に傷を負えば、「学校や先生はそういうもの」といった先入観となって刻み込まれてしまいます。「すべての学校や先生が同じではない」ということは頭では分かっていても、一度傷ついた記憶がそれを許さないのです。

かつて勤めていたとき、「懐に飛び込んでいかないと保護者の信頼は得られない」と感じたことがありました。地区の保護者だったのですが、たくさんのお話をうかがっていると、その思いが飲み込めました。

学生時代自分が、または友人が、学校や教師から差別的な扱いを受ければ、それは間違いなく学校不信、教師不信となってしまいます。その後の人生で、負の記憶を払拭するような強烈な出来事に出会わない限り、その記憶は残り続けていくのです。そして、わが子が学校に通うようになると、保護者として噴出してくるのです。子どものことを本当に考えるならば、教師は保護者の意識も引き受けねばなりません。これは部落差別だけに限った話ではないように思います。部落差別でなくとも、学校や教師に傷を負わされた人がいることを考えれば、「スタートはマイナスから」と心づもりしなければいけないということです。

（次回「やってやろうじゃないか」）

イラスト　中島　亜唯